Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（中国） 2008年 9 月

建築家の思考する曖昧性の概念に関する研究（1）

曖昧性　空間　概念　認識　明確　体験想定

正会員　五日市沙央里*
同　山田深**
同　○丸山友士***

1. 序　空間を思考する際に、空間の曖昧性とは魅力的で関心高いものと考える。その論及は多義に渡り、多数の建築家が空間を思考、創作する上で曖昧性に関する概念を呈示しており、空間の曖昧性とは建築家にとって心引かれる魅力があると言える。しかし一方で非常に捉え難く未知なものであり、その不可解さを掴もうとする姿勢は重要であると考える。その曖昧性を排除しようと試みた思想として機能主義が挙げられるが、近年になりその機能主義に対向するような機能が特定できない建築が散見される。例えば１ルーム形式で分節のない建築など、機能に捕われず様々な出来事を許容する反機能主義的な空間の曖昧性が現代建築の特徴の１つとなりつつあり、曖昧性に対する検討は現代的意義を持つとも言える。以上より本論では、建築家が思考する曖昧性の概念を読み解き、異なる認識の枠組みを捉えることで空間の曖昧性の一端を捉えることを目的とする。

そこで、概念が最も直実に表現される建築家の言説を資料 [1]として扱い、曖昧性に関する記述 [2]が見られた建築家 74 名を対象に概念を考察する（表１）。まず資料数の多い建築家 18 名の概念を詳しく分析し [3]、概念の相違を明らかにすることで曖昧性を捉えていく。

表１.分析対象となる建築家 74 名のリスト

黒川紀章	10	菊竹清訓	3	長尾重武	1	八木敦司	1
伊東豊雄	10	長谷川逸子	3	山下司	1	平田晃久	1
早川邦彦	9	東孝光	2	樋口裕康	1	乾久美子	1
塚本由晴	8	岡田新一	2	長島孝一	1	竹山実	1
坂本一成	6	西澤文隆	2	神谷五男	1	木島安史	1
篠原一男	6	武者英二	2	白澤宏規	1	室伏次郎	1
磯崎新	6	石井和紘	2	坂本和正	1	葉祥栄	1
相田武文	6	大野秀敏	2	高松伸	1	渡辺豊和	1
藤本壮介	5	妹島和世	2	香山壽夫	1	小宮山昭	1
鈴木恂	5	小泉雅生	2	藤本昌也	1	堀池秀人	1
原広司	5	船越徹	2	内藤廣	1	石田敏明	1
小島一浩	5	西沢立衛	2	長坂大	1	宇野求	1
千葉学	5	横文彦	2	遠藤秀平	1	横河健	1
安藤忠雄	5	八重樫直人	2	山本圭介	1	渡部和生	1
谷口吉生	4	ヨコミゾマコト	2	堀啓二	1	渡辺誠	1
山本理顕	4	隈研吾	2	工藤和美	1	北山恒	1
古谷誠章	4	西沢大良	2	有馬裕之	1		
藤井博己	4	出江寛	1	奥山信一	1		
		荒木正彦	1	坂茂	1		
		長部稔	1	飯田善彦	1		

数字は『新建築』より得られた資料数を示す。

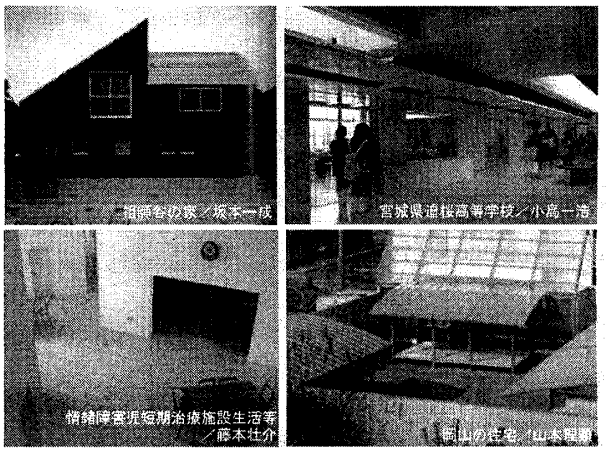
2. 建築家の曖昧性に関する概念　曖昧性に関する資料数の多い建築家 18 名の中から、ここでは代表として 4 名の建築家の曖昧性の概念を取り上げ、その違いを見る。

例えば、坂本一成氏は“生きること自体の身振りがその生活を形成し、住まいは身振りで成り立つ空間である”と述べ、人間の意識そのものが空間化すると指摘している。つまり精神や身体のように主体の意識上で対象化されない曖昧な空間を思考していると言える。

また小島一浩氏は、不特定多数の使用者に対する活動を一様に規定せず、行為の様々な選択性を与える曖昧性を思考している。風の流れや光の受け方など自然要素の在り方についても多様に関係づけており、氏の概念は無規定な空間の曖昧性と言える。

さらに藤本壮介氏は、空間の関係性を創作の主軸とし、使い手が様々な距離を選択できる空間の曖昧性について語っている。つまり多様な認識を誘発する空間概念であるが、小嶋氏のように具体的な行為や活動の誘発ではなく、あくまで距離感という曖昧な感覚の誘発である。体験者の行為や活動をあえて想定せず、空間に感覚的な関係性のみを創造する曖昧性の概念と言える。

そして山本理顕氏は、空間を計画学的に対象化しながらも、緩く包括する曖昧性を思考している。例えば 1993 年「岡山の住宅」では、私と家族の関係図式として空間を対象化している。しかし建築を屋根で覆い緩やかに秩序づけようとする傾向も見られ、ルーフの統合概念として呈示している。この概念は、非常に緩く纏める思考であり、曖昧に明確化していると言える。つまり大まかに関係付ける概括的な曖昧性の概念と言える。



SPATIAL CONCEPTIONS OF VAGUENESS –A study of architects' theories-(1)

ITSUKAICHI Saori, YAMADA Shin, MARUYAMA Yuji

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

3. 建築家の曖昧性の概念の分析　以上の 4 名同様に建築家 18 名の概念の相違の把握を試みた。その結果空間の曖昧性に関わる概念は［明確化－不明確化］［体験想定－体験不想定］という２つの軸から捉えることができた。

［明確化－不明確化］は空間の認識に関わり、建築家が空間を把握する際、空間を対象として認識することを［明確化］とし、空間を認識しないことを［不明確化］とするものである。例えば山本理顕氏は、空間を室や家族などの主題に特定化し、さらにルーフの纏める統合概念により［明確化］する傾向の概念と言える。一方で坂本一成氏は無意識の空間を思考し、特定の表象に認識しないことから特に［不明確化］した概念である。この２名の中間的概念であるのが小島一浩氏であり人間の行為などとして空間を［明確化］し、その選択性を創造することで一様に規定しない［不明確化］する概念と言える。

そして［体験想定－体験不想定］は空間体験に関わる側面である。建築家が思考する空間での体験を想定している場合［体験想定］とし、体験を想定していない場合［体験不想定］とすることで建築家の空間に対する主観性の度合が見られる。例えば小嶋氏は、体験者の立場で多様な行為を想定し創作を行うため［体験想定］である。しかし一方で藤本氏は、具体的な体験を使用者に投げ出していることから［体験不想定］と言える。

以上のように、この２つの軸からなる座標において、分析対象の建築家 74 名全員の概念を分類した結果、曖昧性の概念の違いを捉えることができた（表２）。

4. 結　本論では、空間の曖昧性とは何であるのかという主題を捉えるため、建築家の概念の相違を分析してきた。その結果、空間の曖昧性の概念は［明確化－不明確化］［体験想定－体験不想定］という２つの見方の融合により大きな違いを把握できることが明らかになり、建築界における曖昧性の概念を相対的に捉えることができた。さらに、この違いから得られた概念の異なる枠組みについては次編で説明・考察を行う。

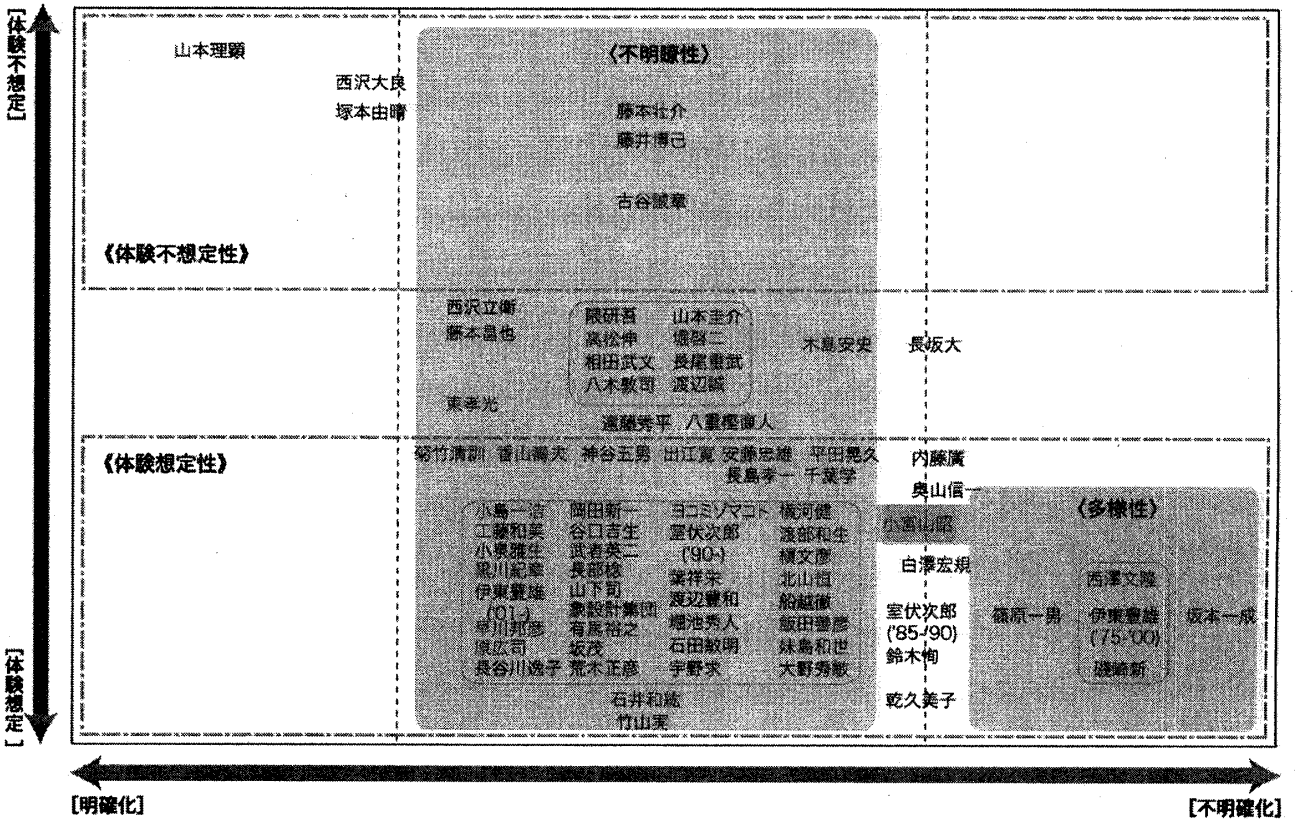
註

1) 本論では主に『新建築』(1970 年-2007 年) に発表された「巻頭論文」「論文」及びタイトル付き「作品解説」を資料として扱う。

2) 本論は空間の曖昧性という多義的な意味を捉えることが目的であるため、単に曖昧性という言葉に限らず‘中間領域、間の空間、余白、機能がない、無意味の空間…’など空間に対する不明確な表現全般を資料としている。

3) ここでは『新建築』の資料に加え、他雑誌である『住宅特集』や『GA JAPAN』『建築文化』の「論文」「作品解説」、さらに各建築家による空間的思考に関する著書も資料として扱う。

表 2. 曖昧性の概念の相関図



* 北海道日建設計
** 室蘭工業大学建設システム工学講師
*** 室蘭工業大学大学院

* Hokkaido Nikken Sekkei
** Assist.Prof,Dept.of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology
*** Granduate school,Muroran Institute of Technology

NII-Electronic Library Service